
IS 転生者は二度目の学園生活を送る

ユウ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

IS 転生者は二度目の学園生活を送る

【Nコード】

N9010V

【作者名】

ユウ

【あらすじ】

アニメ好きな神によりISの世界に転生（強制的に）した男は8年前に起こった戦いから時がたち再び学生として学園に戻ってきた！一夏よりも先にISを動かし、千冬達と幼馴染みの男が送る二度目の学園生活！！

原作とは違う世界で一体何が起きるのか！

プロローグ（前書き）

コードギアス LOST COLORSをやったら書いてみたいと思ったのでやってみました。
駄文ですがよろしく願います。

プロローグ

IS 学園校門前

今、1人の男が学園の校門の前で立っていた。
その男の名は皇ライ
ライの容姿は銀髪にして蒼眼、道を歩けば女性が振り返り、男性からは嫉妬の集中豪雨をあびるような顔をしている。

「ここに来るのは久しぶりだな」
ライは懐かしむ様に学園を見ていた。

すると、学園の方から1人の男性がやって来て挨拶をしてきた。

（ライ視点）

「久しぶりですね、皇くん」

「ええ、お久しぶりです轡木さん」

その男性の名は「轡木十蔵」学園では用務員をしており、親しみや

すさからか『学園内の良心』と呼ばれているが実態はIS学園の実務関係を取り仕切っている事実上の運営者である。
ちなみに…奥さんはこの学園の学園長で夫婦円満らしい。

「この度はありがとうございました、轡木さん。
俺をまたここの生徒にしてくれて。」

俺は轡木さんに頭を下げてお礼を言う。

「良いんですよ、君には感謝してもしきれないだけの恩がありますし」

そう言う轡木さんは俺に頭を上げるように言ってくれた。

「それに、今年は2人目の男性のIS操縦者もいますしね。
たしか…織斑先生の弟さんで、名前は織斑一夏くんでしたか？」

「はい、俺の弟みたいなものですよ」

一夏は元気してるかな、相変わらず朴念仁で主夫してるんだろうな
と若干失礼な事を考えていると…

「そうですか、なら織斑先生は奥さんですかね？」……………
…ハイ？

「轡木さん、それは千冬に失礼ですよ
千冬は『ただの』幼馴染みですよ

俺の奥さんなんて千冬が怒ります」

まったく何て事を言うんだ、千冬の耳に入ったら轡木さんでもただではすまないだろう…

千冬は怒ると抑えるのが大変だからな…カレンもだがそれにここ2年はまったく連絡してないからな下手したら会った瞬間に2人に殺されるかもしれん。

「はあ……織斑先生の恋は前途多難ですね

ああ…紅月先生や山田先生もでしたか」

「何か言いましたか、轡木さん？」

「いえ、何でもないですよ皇くん」

轡木さんがそう言って否定するので、俺はそれ以上追求しなかった……と言うか今はどうやって千冬達に会わないようにするかでそれどころでは無かった。

「さて…いつまでもここに居るわけにはいきません、皇くんには早速クラスに行ってもらいますよ」

「……………はい」

まあ…何とかなるだろ学園は広いんだ上手くいけば今日1日は少なくとも平穏であってくれるだろ…優しい神は（少なくとも俺を転生させた神ではない神）いるはずだしな。

「そういえば、皇くんのクラスの担任は織斑先生、副担任は紅月先生と山田先生ですよ」

..... 神なんて嫌いだあああ!!

1話（前書き）

とりあえず、できるだけ早く更新できるように無い文才を振り絞って頑張ります！

1話

インフィニット・ストラトス、通称ISと呼ばれるマルチフォームスーツが篠ノ之束の手によって開発された時、世界の情勢は一変した。ISには通常兵器がまるで役に立たず、IS一機であらゆる戦況へ対応が可能、陸海空、どの戦力もISには通用しない。その認識が世界へ広まった時、兵器への転用が危惧されたが、世界の思惑から外れた、なぜならISには一つだけ致命的な欠陥があったからだ。

それは、ISは詳しい原因は不明だが、女性にしか扱えないと言う事。その事実が浮き彫りになった時から、女性優遇の体制が世界中に広まり、そして現在は女尊男卑の風潮が広がっていった。

そんな中、世界で2人目の男のIS操縦者がいた
名前は織斑一夏
そして、一夏はそれが原因でIS学園に入学することになった。

〈一夏視点〉

「全員揃ってますね。
それじゃあSHRはじめますよー」

黒板の前でにつこりと微笑む女性副担任こと山田真耶先生

「それでは皆さん、一年間よろしく願いますね」

「……………」

けれど変な緊張感に包まれていて、誰からも反応がない

「じゃ、じゃあ自己紹介をお願いします
えっと、出席番号順で」

ちよつとうるたえる先生がかわいそうなので、俺だけでも反応してあげたいが……………無理だ
なぜなら、このクラスは俺以外全員女子だからだ！！
全員から視線を感じる、かなりいたたまれない…

「……………」

救いを求めて窓際の方に視線を送った
だが、薄情なことに幼馴染みの篠ノ之箒はふいつと窓の外に視線をそらした
なんてやつだ、これが六年ぶりに会った幼馴染みに対する態度だろうか…

「…くん。織斑一夏くんっ」

「は、はいっ!?!」

いきなり大声で呼ばれて思わず声が裏返ってしまった

「あつ、あの、お、大声出しちゃってごめんなさい
お、怒ってる？怒ってるかな？

ゴメンね、ゴメンね！

でもね、あのね、自己紹介『あ』から始まって今『お』の織斑くん
なんだよね。だからね、ご、ゴメンね？自己紹介してくれるかな？
だ、ダメかな？」

……………この人は本当に年上なんだろうか？

同年年と言われれば納得してしまいそうんだけど……

「あの、そんなに謝らなくても……………って言うか自己紹介しますから、
先生落ち着いて下さい」

「ほ、本当？本当ですか？や、約束ですよ？絶対ですよ！」

俺の手を取って熱心に詰め寄る先生
ちゅ、注目が更に増した〜？！

「えー……………と織斑一夏です。よろしく願います。」

儀礼的に頭を下げ、上げる

……………ちよつと待て！

なんだその『もつと色々しゃべってよ』的な視線は！？
そして何だこの『これで終わりじゃないよね』って空気は！？

俺はこの空気の中思いきって口にした！

「以上です！」

がたたっ！

思わずずっとける女子が数名いた
どんだけ期待してんだよ…無茶いな！と思っていると

スパァン！

「挨拶も碌に出来んのか、馬鹿者が」

グオオオオ、あ、頭が！？

い、いや、ちょっと待てこの叩き具合と声は……
恐る恐る振り返ると…

「げえっ、呂布！？」

スパァン！

「誰が三国志最強の武将だ、馬鹿者が！」

目の前には俺の姉、織斑千冬がいた
……っ、ちょっと待て！

「何で千冬ん『スパアン!』…グオオ」

「織斑先生と呼べ」

口より先に出さないで欲しい…そんなだからいつまでたってもライ兄に好きって言えん『スパアン!』

「今、失礼なことを考えただろ」

「い、いえ別に」

お、俺の姉は読心術までできるのか…

「あ、織斑先生、紅月先生会議は終わっただんですか」

「ああ、山田君。クラスへの挨拶を押し付けてすまなかったな」

なんて優しい声

天下無双の呂布はどこに行ったんだ!?

つて……紅月先生!?

「か、カレンさんまだ『スパアン!』」

「貴様には学習能力は無いのか?」

俺の脳細胞がああ…

「久しぶりね、一夏くん。」

「はい、お久しぶりです紅月先生」

千冬姉の後ろから顔を出したカレンさんが笑顔で挨拶してきたので、俺は痛い頭を抑えながら挨拶を返した

「さて諸君、私が織斑千冬だ。君たち新人を一年で使い物になる操縦者に育てるのが仕事だ。私の言うことはよく聴き、よく理解しろ。出来ない者には出来るまで指導してやる。逆らってもいいが、私の言うことは聞け。いいな」

「皆、一年間よろしくね」

カレンさんはいたって一般的なあいさつだが

千冬姉は生徒達にキツイ発げ「『キャー本物の千冬様とカレン様よ！』」

「ずっとファンでした！」

「私、お姉様達に憧れて北九州からこの学園に来ました！」

「あの千冬様とカレン様にご指導いただけるなんて嬉しいです！」

「私、お姉様達のためなら死ねます！」

「…毎年、よくこれだけ馬鹿者が集まるものだ。感心させられる。それとも何か？私のクラスにだけ馬鹿者を集中させてるのか？」

「ハ…ハハ…」

千冬は本気であきれ、カレンさんは苦笑していた
元気なクラスメイト達だよ……うん

その後は俺と千冬姉が姉弟なのがバレたがタイミングよくチャイム

が鳴って一時間目が始まった

「あ」

これはダメだ無理だ！

わからん、まったくわからん…ライ兄、俺は早くも挫折しそうだよ
俺は一時間目のIS基礎理論授業が終わり、机に突っ伏していた…

「ちよつと良いか？」

「え？」

そんな中俺に話しかけてきた女子がいた
顔を上げるとそこには

「……箒？」

「……………」

幼馴染みの篠ノ之箒がいた

「廊下でいいか」

と言うと俺は箒に廊下へ連れ出された

「そつえば」

「何だ？」

「去年、剣道の全国大会で優勝したってな。おめでとう」

「……………何でそんなこと知ってるんだ」

「何でって、新聞で見たし……………」

「な、何で新聞なんか見てるんだ」

「俺には新聞を自由に見る権利も無いのかよ!？」

「べ、別にそこまで言ってないが……………」

「そ、それより一夏訊きたいことがあるんだが……………」

「ん、何だ？」

「そ、その……………ら、ライさんがどこにいるか知らないか？」

「ライ兄？」

「いや、俺も知らないな」

「千冬姉やカレンさんも探してるみたいだけど、まだ見つかってないって」

「そ、そうか……………」

「知らないとわかれると箒は肩を落として落ち込んだ」

「そういえば、箒は昔からライ兄が好きだったよな」

「千冬姉やカレンさん、東さんもだしライ兄はモテるからな」

スパアン！

「とつとと席につけ織斑」

「……ご指導ありがとうございます、織斑先生」

いつの間にか一緒にいた筈は席についていた

俺の脳細胞は午前中だけでどのくらい死ぬんだろうか

「であるからして、ISの基本的な運用は現時点で国家の認証が必要であり、枠内を逸脱したIS運用をした場合は、刑法によって罰せられ」

すらすらと教科書を読んでいく山田先生。ってか意外だ……山田先生のことだから、授業もあたふたしてる内に終了。そんな感じをイメージしてたんだが……そんなことより。

俺の目の前にはどっさりと積まれた教科書五冊。正直に言おう。サッパリ分かん。

一番上のものをばらりとめくるが、意味不明の単語の羅列にしか見えない。分かることといったら日本語ということくらいだ。

「織斑くん、何かわからないところがありますか？」

「あ、えつと……」

「わからないところがあつたら訊いてくださいね。
なにせ私は先生ですから」

わざわざ訊いてきてくれた先生はえつへんと言いたそうに、胸をは
る。

もしかして、本当は頼れる先生なのでは？
よし訊いてみよう。

「先生！」

「はい、織斑くん！」

「ほとんど全部わかりません」
何事も素直でなくては、素直に言えば受け入れてくれるはずだ！

「え……。ぜ、全部ですか……？」

「え、えつと……織斑くん以外で、わからないっていう人はどれぐら
いますか？」

……シーン……

あれ、おかしいな他にもいるはずだ！
皆素直になるんだ！

「……織斑、入学前の参考書は読んだか？」

「古い電話帳と間違えて捨てました」

スパァン！

「必読と書いてあったろうが馬鹿者」

「あとで再発行してやるから一週間以内に覚えろ、いいな！」

「い、いや、一週間であの分厚さはちょっと…」

「やれと言っている」

「……はい、やります」

ギロツと睨む目は人間の皮を被った悪魔だ、間違いない！

あと、カレンさん！

顔を後ろに隠して笑ってないで助けて下さいよ！！

まあ、そんなこんなで二時間目はなんとか終わった。

「ちょっと、よろしくて？」

「へ？」

二時間目の休み時間、俺は突然話しかけられ素っ頓狂な声を出してしまった。

「まあなんですの！その気の抜けたお返事は！この私に話しかけてもらっただけでも光栄なことですよに！その自覚はありまして？」

「悪いな、俺は君が誰か知らないんだ」

余りにも千冬姉達の登場がショッキング過ぎてな…

「わたくしを知らない？」

このセシリア・オルコットを？イギリスの代表候補生にして、入試主席のこのわたくしを！？」

あ、セシリアって言うんだ、ふん。

「あ、質問良いか？」

「ふん。下々のものの要求に応えるのも貴族の務めですわ。よろしくてよ。」

「代表候補生って、何？」

がたたっ！

クラスの女子が数名ずつこけた、どうかしたのか皆？

「あ、あ……」

「『あ』？」

「あなたっ、本気でおっしゃってますの!？」

「おう。知らん」

「信じられない。信じられませんわ。極東の島国というのは、こうまで未開の地なのかしら。常識ですわよ常識。テレビがないのかしら…」

失礼なテレビぐらいあるぞ、見ないけど

それにしても、この場にライ兄やカレンさんがいなくて良かった。あの人達の前で日本を侮辱するのは紐無しのバンジージャンプをするのと同じことだからな…

「で、代表候補生って?」

「国家IS操縦者の、その候補生として選出されるエリートのことですわ。…あなた、単語から想像したらわかるでしょう」

「そついわれればそうだな」
うん、納得だ

「そつ、エリートなのですわ!」

さすがは代表候補生、復活するのも早いな

「本来ならわたくしのような選ばれた人間とは、クラスを同じくするだけでも奇跡……幸運なのよ。その現実をもう少し理解していただけの?」

「そうか、それはラッキーだ」

「……馬鹿にしていますの？」

いや、自分でいったんじゃないか

「大体ISについて何も知らないのによくこの学園に入れましたわね男でISを動かせるというから少しくらい知性を感じさせるかと思っただけ期待はずれですわ」

「俺に何かを期待されても困るんだが？」

「ふん。まあでも？わたくしは優秀ですから、あなたのような人間にも優しくしてあげますわよ。」

そんな優しさは初めてきいたぞ？

「まあ。わたくしは優秀ですからあなたが泣いて頼んできたら……教えて差し上げててもよくってよ何せわたくし、入試で唯一教官を倒したエリート中のエリートですから」

「入試って、あれか？IS動かして戦うってやつ？」

「それ以外にありませんわ」

「あれ？俺も倒したぞ、教官」

まあ…あれは倒したというより自滅だと思っけどな…

「わ、わたくしだけと聞きましたが？」

「女子ではってオチじゃないのか？」

ピシッ！

あ、何か嫌な音だ。

氷にヒビが入ったようなそんな音だ。

「つ、つまり、わたくしだけではないと…？」

「いや、知らないけど」

「あなた！あなたも教官を倒したって言うの！？」

「うん、まあ…たぶん」

「たぶん！？たぶんってどういう意味かしら」

「えーと、落ち着けよ、な？」

「こ、これが落ち着いていられ」

キンコーンカーンコーン

話しに割って入ったのは三時間目開始のチャイムだった。

「っ……！またあとで来ますわ！逃げないことね！よくって！？」

よくない、と言わない方が吉だな。

「それでは、この授業では実戦で使う各種装備の特性について説明する」

三時間目は、一、二時間目と違って山田先生じゃなくて千冬姉が授業をやるらしい

というか山田先生はノートを取ってるし、カレンさんは授業の様子を見てるみたいだな

「ああ、授業の前に再来週行われるクラス対抗戦に出る代表者を決めないとな」

ふと、思い出したように千冬姉が言う

「クラス代表者とはそのままの意味だ。ちなみにクラス対抗戦は、入学時点での各クラスの実力推移を測るものだ。今の時点でたいした差はないが、競争は向上心を産む。一度決まると一年間変更はないからそのつもりで」

教室内が少し騒がしくなった、すると一人の生徒が手をあげて

「はいっ、織斑くんを推薦します！」

「私もそれが良いと思います」

「では候補者は織斑一夏……他にいないか？自薦他薦は問わないぞ」

「お、俺！？」

思わず立ち上がったしまった

「織斑。席に着け、邪魔だ。さて、他にはいないのか？いないなら無投票当選だぞ」

「ちよつ、ちよつと待った！俺はそんなのやらな」

「自薦他薦は問わないと言った。他薦されたものに拒否権はなどない。選ばれた以上は覚悟しろ」

「い、いやでも」

「待つてください！納得がいきませんわ！」

俺の反論を遮って立ち上がったのは、あのセシリアなんとかさんだ

「そのような選出は認められません！ 大体、男がクラス代表だなんていい恥さらしですわ！ わたくしに、このセシリア・オルコツトにそのような屈辱を一年間味わえとおっしゃるのですか！？」

よし、セシリアなんとかさんもつと言つてや……ん？

「実力から行けばわたくしがクラス代表になるのは必然。それを、物珍しいからという理由で極東の猿にされては困ります！ わたくしはこのような島国までIS技術を修練しに来ているのであって、サーカスをする気は毛頭ございませんわ！」

おいおい、それは言い過ぎじゃないか？
というか、それ以上は止めておいた方が良くぞセシリアなんとか、カレンさんの額に青筋がたつてゐるから

「いいですか！？クラス代表は実力トップがなるべき、そしてそれはわたくしですわ！」

……代表にはなりたくないが、こうまで言われると癪だな
カレンさんも教師の立場だからか抑えている……………相変わらず青筋はたつてるが

「大体、文化としても後進的な国で暮らさなくてはいけないこと自体、わたくしにとっては」

ブチッ！

駄目だ頭に来た！

「イギリス『おい小娘、それ以上私の祖国と弟を侮辱するのは許さ
んぞ？』だっ……………て……………え？」

俺の言葉を遮って教室の扉から一人の人物が入ってきた

え……………ライ兄？

1 話（後書き）

なんか中途半端に終わってしまいました
つたない小説ですが、どうか広い心でこれからもよろしく願います。

誤字脱字がありましたら言って下さい。

2話（前書き）

まだ、たいして書いてないのに早くも小説を書く大変さを実感します。

ですが、頑張って行きたいと思います！

暁の魔さん、感想ありがとうございました！

2話

（ライ視点）

「…ついに来てしまった」

轡木さんと別れた後、俺は制服に着替え自分のクラスに向かう
…はずだったんだが、ついつい懐かしくて学園内を見て回ってしまった
った

そして気づいたら三時間目がもう始まる時間に……

いや、別に千冬達から逃げたくてちよつと現実逃避してたわけではない、本気で！

そして俺は今『1 1』の教室の前にいるわけだが…

『実力から行けばわたくしがクラス代表になるのは必然。それを、物珍しいからという理由で極東の猿にされては困ります！ わたくしはこのような島国までIS技術を修練しに来ているのであつて、サーカスをする気は毛頭ございませんわ！』

教室の中から甲高い声が聞こえてきた…

聞いてる限りだと、クラス代表を決めていて一夏が候補に挙がったのに反論したつてところか…

にしても、なんだこの生徒は日本人を極東の猿だと…
だいたい、イギリスだって島国だろ！？

何かまだ色々言ってるな

だが我慢だ、相手は年下の娘じゃないか
大人の心で我慢…

『大体、文化としても後進的な国で暮らさなくてはいけないこと自体、わたくしにとつては』

ブチッ！

できるかああああ！

気づくと俺は教室の扉を開けてしまっていた…

「おい小娘、それ以上私の祖国と弟を侮辱するのは許さんぞ？」

何か一夏の言葉を遮ってしまったみたいだが…

まあ……いいか

それよりも、今はこの小娘をどうするかが最優先だ

「一夏視点」

クラスは、突然入ってきたライ兄の雰囲気です。静まりかえっていた…

俺や箒、千冬姉とカレンさんは余りに突然の再会で口をポカンと開けていた

「君がセシリア・オルコットか？」

「え？あ、あの…はい

あ、あの…あなたは…」

「私か？私は皇ライ

今日から、この学園の生徒になった者だ」

「っ！？」

セシリアが名前を聞いた瞬間ビクツと肩を震わせた

ん、ライ兄を知ってるのか？

というか、口調が変わってるぞ？

まあ、この空気じゃ仕方ないが…気温が5度は下がった気がする…

「私の自己紹介は後でしょう」

「セシリア・オルコット、君はさつき男を下に見る発言をしていたがISを使えるなら対等じゃないのか？」

それに一体君に日本を侮辱する権利があるのか？どうなんだ？」

「そ、それは……」

ライ兄……キレてるよな？セシリア……このままじゃ不味いんじゃない……

「私はなオルコット……」

日本と日本人を侮辱する奴とそして何より身内を侮辱する奴が嫌いなんだよ」

その瞬間、ライ兄がセシリアに殺気をぶつけたのがわかった

俺まで冷や汗が流れてるんだ、まともに受けているセシリアは顔面蒼白になっている……

「ラ……皇止めるんだ！」

「駄目よ、ライ！」

千冬姉とカレンさんがこの空気の中、ライ兄を止めに入った

「……………すまない二人共」

ライ兄は二人の顔を見ると落ち着いたのか
さつきまでの冷たさが消えていた

「ふう、それではクラス代表を決めるために試合を行う。」

試合は一週間後の月曜日。放課後、第三アリーナで行う。織斑、オルコットはそれぞれ準備し、『ちよつと待ってくれ織斑先生、その試合俺も参加させて欲しい』……何？」

「だから、俺も参加すると言ったんです（こいつらに世界の広さを教えておくのも一興だろ）」

「（なるほど、そういう事ですかわかりました
それと、後で色々訊きたいことがあるので覚悟していて下さい）」

「（……………どうか1つ穏便に）」

「（無理です）
良いだろ、では織斑、オルコットの勝った方が皇と闘うことにする」

何か色々決まってしまったが……反論しても無意味なんだろうな…

「二人ともそれで良いな」

「は、はい、それで構いませんわ」

「……………はい」

「よし！」

では皇、自己紹介しろ」

「わかりました。

先ほどはいきなりすまなかった。

俺の名前は皇ライ、皆とは年も離れているが気にせず接して欲しい。
よろしく頼む。」

と柔らかい声で自己紹介しライ兄は一礼した。
キレてるときと差がありすぎるな…

クラスの皆は一体どんな反n『キャーーーーー』

「めちゃくちゃカッコいい!!」

「怒ってる時とのギャップがいいー!!」

「神様ありがとう!この地球に生んでくれて」

うん、このクラスの空気には早くなれた方が良さそうだ
それと最後の!

生んでくれたのは神様じゃなくてお母さんだ!

「さて、自己紹介はここまでだ
授業を始める」

こうして授業が進み、休み時間になった。

「授業は終わりだ。

皇、織斑、篠ノ之は私についてこい

紅月先生も来て下さい」

千冬姉はそう言うときあき教室に俺たちをつれていった

「さて、ライさん一体これはどういう事が説明してくれますか？」

「いや、ほら…俺ってこの学園をきちんと卒業してないだろ？だからもう一度生徒としてあの人（轡木さん）に招かれたんだ」

「そうですか……」

ですが、私はまったく聞いてないんですが？」

千冬姉は一瞬表情が暗くなったが、すぐにいつも通りの表情に戻った
どうしたんだろうか？

「えーと、あの人が言うには……サプライズだって」

「はぁ……まったくあの人」

「え、ライ兄って卒業してないの！？」

それにあの人って誰だよ、千h…織斑先生？」

「今は私たちしかいないから千冬姉で構わん
卒業の話に関してはいずれ話す」

「そ、そう」

ところで、ライ兄は今までどこに行ってたんだ？」

俺は……いや、俺たちが一番知りたい事を訊いた

「そうよ、ライ今までどこにいたのよ！

束に訊いても知らないって言うし

私たちがどれだけ心配したか知ってるの?!」

「そうですね、納得のいく理由を話して貰いますよライさん」

「ら、ライさん、私も知りたいです」

俺、カレンさん、千冬姉、箒に詰め寄られるライさん

「え、え」と、束と世界を回ってたんだ」

『はあああああ！？』

カレンさんと千冬姉、箒の声が綺麗に重なった

「ちょ、ちよつと、待ってよ

私束に訊いた時、知らないって言ってたわよ！？」

「わ、私もです！」

「くつ、束騙したな！！」

三人ともめちゃくちゃ悔しがってる

というか箒、お前束さんを避けてたんじゃなかったか？

どんだけ知リたかつたんだよ…

「ん、てことは…ライ兄って束さんとずっと一緒に生活してたんだ？」

「ん…ああ、そうだ」

『！？』

今、千冬姉達に雷が落ちたように見えたんだが…

『ら、ライ（さん）！！』

「うおっ、な、なんだ？」

千冬姉達がまたライ兄に詰め寄った

「ら、ライ？」

あ、あなた…」

「ま、まさか…」

「姉さんと…」

「何を勘違いしてるか知らないが…束とは何もないぞ」

『べ、別に勘違いなんてしてません（ないわよ）！！』

いや、明らかにしてたでしょ。

「なら良いが…」

というか、束とは‘ただの’幼馴染みだ
何かが起こるわけないだろ」

『……………』

「……………そうね、心配するだけ無駄だったわね…」

「……………どうして、この人はこうも……………」

「ライさん……」

「？」

ライ兄に三人から非難の視線が送られるが…
ライ兄はわかってないんだろうな…

「ゴホン、さてそろそろ休み時間が終わる
お前達、教室に戻るぞ」

千冬姉の言葉で休み時間がもう終わる事に気づいた
俺たちは教室に戻ろうとあき教室を出ようしたが…

「みんな、ちょっと待て」

「？」

ライ兄に呼び止められた

「えーと、その……
た、ただいま」

ライ兄は頬をかきながらそう言った
俺たちは顔を見合せ
そして

『おかえり（なさい）！』

笑顔で返した

『ところで、ライ（さん）』

「ん、なんだ？」

『今度、数年間の埋め合わせしなさいよ（して下さいね）』

「……………ハイ」

ライ兄、ドンマイ

2 話（後書き）

えゝ無理矢理感がすごく感じますね、申し訳ありません

誤字脱字がありましたら、言って下さい。

キャラ設定（前書き）

内容は随時追加予定です

キャラ設定

名前 皇ライ

年齢 26

容姿 銀髪に蒼眼

(Lost Colorsのパーフェクトガイドに載ってたのを記載)

身長 180前後

性格 普段は温厚だがキレると口調が変わり「俺」から「私」になる
天然ぽい部分あり

朴念仁

IS適性 Sランク

備考 コードギアスLost Colorsの主人公のライ
ギアス篇で再び眠りについたがアニメ好きな神によってISの世界
へ転生させられた。

その際、神によって記憶やギアスは消されており、転生させられた
と言う記憶だけを持っている。

その後、アメリカ人の父と日本人の母の元に転生するが、ライが幼
い時に亡くなり母方の祖父に引き取られる。千冬やカレン、束とは
幼い頃からの付き合い。

三人とは年が1つ違うが本人は余り気にしていない。

実際にカレンは主人公を呼び捨てで呼ぶ。

8年前、「黒騎士事件」に参加している。

ISの操縦技能は千冬やカレンと互角に渡り合える程で、指揮能力にも長けている。

現在、8年前の「黒騎士事件」で破損したISの代わりにガンダムOOの世界のスサノオを多少改良した「須佐之男」を神から一時的に受けとっている。

名前 紅月カレン

年齢 25

容姿 コードギアスのカレン

性格 快活で直情的

IS適性 Sランク

備考 コードギアスの紅月カレンそのままである。

ただ、原作とは違い母親とは特に問題もなく良い親子関係を築いている。

ただ、父親はおらず兄もいない。

ライや千冬、束とは幼馴染みで一夏や箒の2人目の姉的存在。

鈴とも面識がある。

ライに想いを寄せており、同じく想いを寄せている千冬や束に比べ一歩遅れている事を気にしている。

8年前の「黒騎士事件」に参加している。

ISの操縦技能は千冬と互角以上に渡り合える程。

IS設定

IS名 「須佐之男」

持ち主 ライ

製作者 神

（一般的には束が作った事になっている）

世代 第四世代：一応

待機状態 当初は仮面の予定だったが悪趣味と言う事で黒い腕輪になった

ガンダム00のスサノオをIS化させたもの。

神がライに一時的に貸したIS、なぜスサノオのかは単純に神（作者）が好きだから、とのこと。

束との旅の最中に神から渡された、未知の技術を使用しているため表向きは実験機と言うことになっている。

主な武装

強化サーベル「シラヌイ」「ウンリュウ」

両方とも実体剣とGN粒子を纏わせることでビームサーベルとしての特性も併せ持つ。

。2本の柄を連結させることで、双刃の薙刀「ソウテン（蒼天）」

となる。

トライパニッシャー

腹部と両肩の砲口を展開し、3門のビームを球状に収束・圧縮して撃ち出す。

ただし、粒子消費量がかなり多いのが難点。

ワンオフ・アビリティー（単一仕様能力）
トランザム

3話（前書き）

ゼロさん、犬丸さん、感想ありがとうございました。

3話

くライ視点く

あれから時がたち放課後になった
俺は一夏にISについて教えていた

「くと言う訳だ、解ったか一夏？」

「な、何とか」

頭から煙が出てるが…

まあ、専門用語がたくさんあるからな…

「ああ、織斑ちゃんと皇先輩、まだ教室にいたんですね。よかったです」

「山田先生、俺は今は生徒なので先輩はちょっと…」

「あつ！？す、すいません」

「まあ…早く馴れるよう頑張つて下さい。
それで、何か用があったんじゃないんですか？」

「そ、そうでした！

えっとですね、寮の部屋が決まりました」

「あれ、俺の部屋は決まって無いって話を聞いたんですけど？
一週間は自宅から通うって事になってたはずじゃあ？」

俺の後ろから一夏が山田くんに訊いた

「そうなんですけど、事情が事情なので一時的に部屋割りを無理矢理変更したらしいです」

「部屋の件は解りましたけど、荷物は一回家に帰らないと準備できないですし、今日はもう帰っていいですか？」

「俺は旅の荷物を持ったまま来たから別にいいですよ」

荷物は轡木さんに預けてあるからな
後で取りに行かなくては…

「あ、いえ、荷物なら」

「私が手配しておいたありがたく思え
皇のも預かってきている」

「ん…そうですね、ありがとうございます。」

「ど、どうもありがとうございます……」

「まあ、生活必需品だけだな。
着替えと、携帯電話の充電器があればいいだろう」

相変わらず大雑把だな千冬……

人間には日々の潤いも大事だと思うぞ？

「では、部屋の鍵をお渡しします。

一ヶ月もすれば個室の用意ができますから、しばらくは相部屋で我慢して下さい」

そういうと山田くんは部屋の鍵を俺に渡した

「あれ、俺の鍵は？」

そう言われると一夏の分の鍵がないな

「貴様は私と同じ部屋だ」

「えっ！？お、織斑先生と？！」

「そうだ、何か不満でもあるのか？」

「……………イエ、ナイデス」

「なら良い（私だって本当はライさんと……………）」

一夏…諦める

同世代の男女を相部屋にするのは色々駄目だ…道徳的に俺なら良いのかと言われれば……………どうなんだろう？

「じゃあ、時間を見て部屋に行ってくださいね。夕食は六時から七

時、寮の一年生用食堂で取ってください。ちなみに各部屋にはシャワーがありますけど、大浴場もあります。学年ごとに使える時間が違いますけど……えっと、その、織斑くんと皇……くんは今のところ使えません」

「え、なんでですか？」

「まあ……当然ですね」

一夏……本当に分からないのか？

さすがにソレは不味いぞ

それと山田くん、あの一瞬の間は何だ？

そんなに抵抗があるのか？

「アホかお前は。まさか同年代の女子と一緒に風呂に入りたいのか？」

「あー……」

やっと気づいたか……

「おつ、織斑くんっ、女子とお風呂に入りたいんですか！？だっ、ダメですよ！」

「いつ、いや、入りたくないです」

それが当然だ、万一人入りたいと言ったら後ろの鬼（千冬）が黙ってないだろう……

女子だって嫌だろ……

でも、一人ぐらい「別に良いですよ、むしろ是非一緒に！」なんて

言いかね無い奴がいそうだ、この学園

「え、ええっ！？女の子に興味が無いんですか！？そっ、それはそれで問題のような・・・ま、まさか…皇…くんと」

ちよつと待つんだ山田くん！？

なぜ、そこで俺が出るんだ、俺はノーマルだ！

そして、廊下で山田くんの言葉を聞いた女子が…

「織斑くん、男しか興味が無いのかしら……しかも相手は皇くん？」

「それはそれで……いいわね。（じゅるり）」

「織斑くんと皇くんの関係を洗って！すぐにね！明後日までには裏付けとって！」

俺はノーマルだああああ！！

「えっと、それじゃあ私たちは会議があるので、これで。織斑くん、皇…くん、ちゃんと寮に帰るんですよ？道草食っちゃダメですよ？」

山田くん、校舎と寮の間は50メートルぐらいだぞ？

道草をどう食えと言っただ？

「えーと、ここか。1025室だな」

「じゃあライ兄、俺と千冬姉の部屋は向こうだから、また」

そういうと、一夏は自分の部屋に向かっていった

俺は部屋に入ろうと鍵をさしたが、どうやら鍵はあいていたらしい
そして、俺は部屋に入って一直線にベッドにダイブした

「さすがに今日はちょっと疲れた」

旅先から直接来たのだから仕方がないか……
と思っているとシャワーがある部屋から聞き覚えのある声がした

「誰かいるのか？」

「ああ、同室になった者が。これから一年よろしく頼むぞ」

……すごく嫌な予感がする

「こんな格好ですまないな。

シャワーを使っていた。私は篠ノ之」

「 篇」

「……………」

篇は突然の出来事にきよとした顔をしている。

それが、ちょっと可愛いと思ってしまった

「ら、ら、ライさ……?」

「あ、ああ……」

「き……」

「き?」

あ、何か嫌な予感

「キヤーー」『ちょっと待て、箒!?!?』

悲鳴をあげた箒の口を抑えようとして

俺は誤ってバランスを崩し、箒を押し倒す形になってしまった

ヤバイ……

こういう時に限って…

「ちょっと、悲鳴が聞こえたけど何かあつ……!?!?」

部屋が勢いよく開かれ入って来たのは……カレンだった

状況を確認しよう

俺 バスタオルを一枚巻いただけの色々と際どい状態の箒を押し倒している

箒 顔を赤らめ俺に押し倒されている

カレン 悲鳴が聞こえて入ってみれば俺が箒を押し倒している（事故）状況を目撃

駄目だ……言い訳できる状況下じゃない

「……ラァイーーーーッ！」

「ぐがつ！？違うんだカレン！これは事故なんだ…っ！」

「遺言は聞いてあげるわよ…さぁ…言い残す事はあるかしら…!？」

カレンは俺の襟首を掴んで立たせるとギリギリと締め上げてくる

「だいたい、なんで、なんで私じゃなくて箒を押し倒してるのよ！？」

「き、君は…な、何を…いつ…て…?」

「ライなんて………!」

い、息が…

「ひ、人の話を………」

「弾けるおおおお!!」

カレン：それは俺に死ねと？

そんな事を疑問に思いながら、カレンから見事なパンチを貰い俺は意識を手放した：

「ごめんなさい」

意識を取り戻した俺の前でカレンが頭を下げて謝ってきた

「いや、元はと言えば俺が悪いんだから、もう良いよカレン」

「そ、そう？ありがとうライ
それと私が何を言ったか覚えてる？」

「いや、殴られる直前の記憶があやふやで覚えてない」

「そ、そう、なら良いわ」

そう言つとカレンはもう一度ごめんね、と言つて部屋を出ていった
何でも仕事に必要な資料を取り部屋に戻る途中だったらしく、まだ
仕事が残つてるのだとか……

「さて、箒本当にすまなかった！」

不可抗力とはいえあんな事をしてしまつて」

俺は今まで椅子に座つてた箒に謝罪をした
ちなみに箒の服装は剣道着だ。

「あ、いえ…私も突然の事に驚いてしまつて…
き、気にしてないので大丈夫ですよ…むしろ嬉しかったと言いま
すか…」

「ん、最後なんて言つたんだ？」

「い、いえ、何も言つてませんよ?!」

「そ、そうか」

『……………』

少しの沈黙の後先に口を開いたのは箒だつた

「あ、あの、ライさんが私の同居人でいいんです…よね？」

「あ、ああ、そうだよろしくな」

「は、はい、よろしく願ひします。

そ、それですね、この部屋の決まりと言いますか…その、く、暮
らす上で線引きは必要ではないかと……?」

たしかに、ちゃんと決めておけばさつきみたいな事故は無くなるしな

「わかった、ならシャワー室の使用時間は箒が七時から八時。俺が八時から九時でどうだ？」

「は、はい、部活の後に使えるならそれで大丈夫です」

「部活」

そういえば、箒は去年の剣道の全国大会で優勝したんだっとな、おめでとう」

今日は色々ありすぎてつい忘れてしまっていた

「な、何で知ってるんですか！？
し、新聞で見たんですか？」

「いや、俺は直接見に行ってたんだ
ある人が箒が全国大会に出るのを教えてくれてな」

ある人とはもちろん束の事だ
優勝したのを教えた時は俺以上に喜んでいたな

「あの場にいたんですか！？
声をかけてくれれば良かったのに！」

「いや、あの後すぐに飛行機に乗る必要があつてな
時間が無かつたんだ、ごめんね」

「い、いえ、良いんです来てくれただけでも」

箒は応援に来てくれていたのが嬉しかったのか顔を少し赤らめていた

「そうだ、明日から一夏を鍛え直すつもりなんが、箒も手伝ってくれないか？」

「は、はい、是非！」

「そうか、ありがとう」

「／／／／」

どうしたんだ？

微笑んでお礼を言ったただけだが…？

「あ、あの、私はもう寝ます！
お、おやすみなさい」

と言うと箒はベッドの中に入っていった

俺はおやすみと返すとシャワーを浴びてベッドに入って寝たのであった。

4話（前書き）

Yuuさん、感想ありがとうございます！

4話

「ライ視点」

「（やってしまった）」

「／／／／／」

俺は今、顔の赤くしている箒と一緒に食堂に向かっている。
箒が赤くなっている理由は今朝の出来事が原因だ……

朝方、俺はいつも通り六時ぐらいに目がさめた、そしてふと隣の箒のベッドの方を見ると……

着替えの最中の箒がいた

………箒さん、何でこんな所で着替えてるんですかね？

「……………！？」

あ、箒が気付いた……

これは……昨日のパターンじゃ？

「ほ、箒……？」

「……………／／／」

箒は顔を赤くしてまるでロボットのような動きでシャワー室に入って行った

そして現在に至る訳だが

「ほ、箒、すまなかった」

「い、いえ／／／」

こんな感じで何を言っても顔を赤らめたままである

「（これならまだ声をあげられた方が……いや、それはそれで困るが……）」

このままと言っのはかなり気まずい
と思っていると後ろから声がした

「二人とも、おはよう」

「一夏か、おはよう」

「お、おはよう／／／」

そして箒は顔が赤いまま早足で一人席の方に向かっていった

「ライ兄、何かあったのか？」

「ああ……とりあえず席についたら話そう」

俺と一夏は朝食を取って空いてる席に座った。

ちなみに、俺は至って普通の量だが一夏はかなりの量である
そして俺は事情を一夏に話した

「ええ！？ライ兄と箒って同じ部屋なのか！？」

「ああ、何故かは知らないがな」

そんな時三人組がこちらに向かってきた

「織斑くん、皇くん隣いいかな？」

「ああ、別にいいけど」

「俺もいいぞ」

女の子たちは安堵したり……ガッツポーズをしている娘もいるな

「うわ、織斑くんって朝すっごい食べるんだねー」

「お、男の子だね」

「俺は夜少なめ取るタイプだから、朝たくさん取らないと色々きついんだよ」

一夏が女の子たちの質問に答えてるの聞いてふと「千冬やカレンもだったな」と思っている

「ていうか、女子って朝それだけしか食べないで平気なのか？」

一夏、女の子は体重を気にする生き物なんだぞ

「わ、私たちは、ねえ？」

「う、うん。平気かな？」

「お菓子よく食べるしー」

間食は程々にな…

そんなこんなで朝食を食べ終わり、今日も1日が始まった

そして時は既に放課後、俺は今一夏を鍛えるために剣道場に来ていた

「なあ、ライ兄一応聞くけどこっつて…」

「見ての通り剣道場だ、今からお前を鍛え『なにをしている！』…
タイミングが良いな、箒」

しかし、箒は顔を赤らめて俺から目を逸らした

「（まだ駄目か…）」

朝から相変わらずこの調子である

まあ、一夏を鍛えるうちに元に戻るか…

「さて一夏、改めて言うがここに連れて来たのは他でもない、お前を鍛えるためだ」

「え、俺を？」

「ああ、今のお前がオルコットと闘っても、まず勝てないからな」

「っ……………！」

まあ…自分でも自覚はしてたみたいだな

「そこでだ、俺と箒で多少マシになるようにしてやる」

「え、マシって、勝てるようにはならないの!？」

「はぁ…………一週間やそこらで勝てるように成る程、ISは甘くないよ」

「うっ…………たしかに」

「わかれば良い、そこでだ一夏、箒と試合をするんだ」

「え、何で？」

「まずはその鈍りきった体を何とかしなくちゃ駄目だろうが
ん、帰宅部で三年間連続皆勤賞さん？」

「な、何故ソレを？」

「織斑先生から聞いた
とりあえず、まずは箒に鍛えて貰え
俺との修行はその後だ」

「……………ハイ」

「よし！」

「じゃあ、箒あとは頼む」

そういうと俺は剣道場から出て行こうとする

「ら、ライさん、どこに行くんですか!？」

今の今までフリーズしていた箒が再起動した

「何、修行の準備だ」

後日、一夏が言うにはその時の笑顔はとても黒かった、とのことだ

それからと言うもの一夏の修行は体力づくり、箒との試合、死角からの攻撃（主にいつでもどこでも隙があれば攻撃）の回避訓練をひたすらやった

そして今日は月曜日、試合当日なのだが……

「まだなのか一夏の専用機のISはまだか!!」

「みたいだな、どれ一夏ギリギリまで修行するか」

「勘弁して下さい!!」

そんなに嫌か？

たしかに食事中や授業中に攻撃したのはやり過ぎたと思うが……
ちなみに、千冬もたまにだが攻撃していた

それにしても一夏の専用機遅いな、と思っていると

「織斑君、織斑君!!」

山田くんがこちらに走ってきた、しかし今にも転けそうで危なかった……

「先生、まず深呼吸してください。はい、吸って」

「は〜ふ〜は〜ふ〜」

一夏、それは年上の人にやることじゃないぞ？

「お前は少しは年上に人に対する礼儀をしれ！」

後から入ってきた千冬に出席簿で殴られる一夏
ん、カレンがいないな

「織斑先生、紅月先生はどうしたんですか？」

「紅月先生はオルコットの方に行っている
むこうに誰も行かないわけにはいけないからな」

たしかに、教師として例え知り合いだとしても一夏を鼻屑にするわけにはいけないからな

そして千冬の後ろから入ってきたのは…

成る程、そういうことか…

束が作っていたのはこの日のためか…

“白” 真っ白で何もない

まるで雪のようなそんな白

そして、それに触った一夏は言った

「理解できる、これがなにか分かる、なんのためか分かる！」

「ISのハイパーセンサーは問題なく動いているな
気分はどうだ一夏？」

「大丈夫、千冬姉。いける」

「そうか」

「ライ兄、千冬姉、箒、行ってくる！」

『行つてこい！』

俺たち三人の声が重なった

く一夏視点く

俺は今セシリア・オルコットと向き合っている

「最後のチャンスをおげますわ」

「チャンスって？」

「わたくしが一方的な勝利を得るのは自明の理。

ですから、ボロボロの惨めな姿を晒したくなければ、今ここで謝るというのなら、許してあげないこともなくつてよ」

「そうというのはチャンスとは言わないな」

「そう？残念ですわ。それなら」

警告！敵IS射撃体勢に移行。トリガー確認、初弾エネルギー装填。

「お別れですわね」

耳をつんざくような独特の音。

それと同時に走った閃光が刹那、俺を貫くはず……

「なめるな！」
だった

俺は攻撃を咄嗟に横に避ける

「なつ、わたしの攻撃を避けた！？」

「ライ兄に鍛えられたんだ簡単には負けないぜ！」

そうだ、毎日毎日痛い思いしながらやって来たんだ……本気で痛かったんだ

「くっ、一回避けただけで調子に乗らないで欲しいですわ！。
さあ、踊りなさい。わたくし、セシリア・オルコットとブルー・テ

「イアーズの奏でる円舞曲で！」

（ライ視点）

「うん、修行の成果はあったか」

一夏は初撃を見事に回避した
修行の成果は有ったみたいで良かった

「ですね、でも……………」

「ああ、あのビームの雨を全弾回避するのはまだ無理だな」

一夏は今BTのビームを回避しているが、避けきれずに当たっているのも少なくはない

「でも、一夏はこのままじゃ終わらないさ、ほら」

俺はモニターの方を指差した

「え？」

第もモニターを見てみると、そこにはビットを二機斬り倒して、セシリアに斬りかかる一夏が映っている

『おあいにく様、ブルー・ティアーズは六機あってよ！』

しかし、接近していた一夏に隠していた弾道型のB.Tが待ち受けていた

ドカァァン！

一夏に命中し画面が黒煙に埋まった

「一夏っ……………！」

それを見た箒が思わず声を上げた

「大丈夫だ、箒
ね、織斑先生？」

「ああ、機体に救われたな馬鹿者め」

煙が晴れたそこにはあの純白の機体があった

真の姿で

あれが持っているのは…

「雪片式型」、かつて千冬が振るっていた「雪片」と同じ名前を持った装備

『俺は世界で最高の姉さんを持つたよ』

「だ、そうですよ織斑先生？」

「良かったですね、織斑先生」

俺、山田くんの順に千冬に言うと

「山田くん、私はからかわれるのが嫌いだ」

山田くんの頭を掴みアイアンクローをきめる千冬

「な、何で私だけ……！」

山田くんから助けて下さい、と言う視線を送られるが…

「さて、一夏はどうだ？」

俺はモニターの方を見た

山田くんの救難信号は……見なかった事にした
何か後ろで嫌な音が聞こえたが……気のせいだな

そしてモニターには雪片を出した一夏がいる
あ…これは…駄目だ

一夏の勢いに圧倒されたオルコットは間合いを詰められた、一部を
除く全員が一夏の勝利を確信しただろう
だが、一夏が勝ったと思った瞬間、ブザーが鳴った
そして……

『試合終了。勝者 セシリア・オルコット』

『はっ!?!』

アリーナで闘っていた二人が一番驚いているな……

でも、よく頑張ったよー夏

4 話（後書き）

なかなか、上手く纏められなかったです。
しかも、かなり拙い気が…

もっと上手く書けるようになりたいですね

5 話（前書き）

紅さん、ゆやさん、イオルさん感想ありがとうございます。

主人公の一人称については後書きで説明します。

5話

く一夏視点く

「馬鹿者め。ISの特徴も知らずに、使うからだ。」

千冬姉

戻ってきた弟に一言目からそれですか……………

「はあ………ごめん、ライ兄、箒。二人から色々としてもらったのに」

「気にするな、一夏。

お前は頑張ったよ」

「ありがとう、ライ兄」

ぐすっ、ライ兄だけだよ

労ってくれるのは。

「皇、お前の試合は一時間後だ
オルコットのメンテが終わり次第始める」

「わかりました、織斑先生。じゃそれまでウォーミングアップでも
…」

キラッ！

なんか来た！

この感じは！！

「フンッ！」

「ちょ、のわぁ！」

ライ兄からの腰への正拳突き

なんどもくらっていたから、寸前でかわした

っていかかすただけでも、アザができそうな威力なんですけど
！？

「あ、危なッ！」

「まあ、冗談はこれぐらいにして…」

冗談ってライ兄……

それから一時間後、連絡が入った。

セシリアの準備がそろそろ終わるらしい

ライ兄の試合まで残り数分まで迫った

「さあ、行こうか」

腕輪から光りが漏れ、ライ兄がISを展開した

「これがライ兄のIS……」

俺の目の前には『黒い侍』がいた

鎧武者風の黒い装甲に、二本角が生えたフェイスマスク、二本の刀
を持ち背中から赤い粒子を出している全身装甲型のIS
フルスキン

「なんだ、このISは……?」

千冬姉も驚いている

というか、千冬姉はライ兄のIS知ってるんじゃないのか…?

「それじゃあ、行ってくるよ」

「あ、ライ兄頑張って!」

「ライさんが負けるとは思いませんが頑張ってください」

「……やり過ぎないようにな」

俺達からの声援を聞いた、ライ兄は頷くと発射口へと飛び立っていった

くライ視点く

「何ですか、そのISは!?!」

アリーナで先に待っていた、オルコットが俺のISを見て驚いていた

フルスキン
全身装甲型のISは珍しいが、……そこまで驚く事か?

「俺のISの事は気にするな。」

それより一夏はどうだった、なかなかやるだろ?」

「ッ!……ええ、正直私が今まで会ったことの無い男性でしたわ」

「そうか…それは何よりだ」

これで彼女の男に対する認識は変わったかな?

「さて、話はここまでだ
始めようか」

「ええ、黒騎士事件で三傑と謳われた方とは言え、ただで負けるつもりはありませんわ」

「その呼び方は嫌いなんだけどな…」

「行きますわ!」

オルコットはBTを散開させつつ、スターライトmkIIIを放つ

俺は左手の不知火を一閃し、ビームを切り落とした

「ビームを……切った……!?!」

オルコットが信じられないものを見るように言っが…

「驚いている場合じゃないぞ？」

俺はオルコットに接近し不知火を上段から振るう

「なっ………！」

オルコットは咄嗟に下がるが、反応が遅れていたため完全に避けきれず、持っていたスターライトmkIIIが犠牲となった

「くっ………まだですわ」

真っ二つになったスターライトmkIII投げ棄て、BTで牽制しつつ距離をとる

近づこうとダッシュをかけようとしてもBTが邪魔をする

「………うっとおしいな」

俺は撃ち込まれるビームをジグザグに避けBTに接近し、一閃する

「BTが……!？」

綺麗に輪切りになったBTは、バチバチと音を立てながら落下し、爆発した

「……………さあ、これからだ」

く千冬視点く

いまアリーナでライさんとオルコットが闘っている

戦況はどこからどう見ても、ライさんの圧倒的有利

「しかし、あのISは……………」

あのISは私が知っているライさんのISとはまったく違っていた

束の試作機か…………？

そうだとすると、あのISは現存するISとは違う点が多すぎる

それとも全く別の物？

「これは、色々訊かなくてはいけないようだな」

当然旅のことも含めて、だ

後でカレンにも連絡をとらなくては

くライ視点く

あれから、俺は更にBTを二機破壊した

疲労困憊といった様子で肩で息をつくオルコットを正面に見据える

近接用の武器であるインターセプターを出してはいるものの……
扱いが下手だな

「そろそろ、終わらせよう」

俺は真正面からオルコットに向かって切りかかる

「くっ……まだ、まだですわ！」

BTがビームを放つ

俺はそれを最小限の動きのみでビームを避ける

軽く熱さを感じるくらいの極々近距離

「ビームが…すり抜けた!？」

相手からだほとんど動いていないように見えるのだろう

オルコットが驚きと共に凍りつく

「さっきも言っただけだ…」

「ッ!？」

「驚いている場合じゃないと」

もう既に射程圏内

これで決まりだ

「しまっ…!!」

俺は両手の刀を交差させ、ブルー・ティアーズの胴体を薙ぎ払った

インターセプターが中ほどから二つに別れ、

ガラスの破片のように散っていくシールド

絶対防御がエネルギーを消費させていき、

『試合終了、勝者、皇ライ!』

決着が、着いた

ん、オルコット気絶してないか？
仕方ない背負って行くか…

くー夏視点く

「やっぱ、凄いなくライ兄は……」

「当然だ、ライさんが負けるはずないだろ」

「そりゃそうだけどさ…」

でも、あんなに強いなんて知らなかっただろ筈も?」

「むっ……それはそうだが…」

よくよく考えると俺達ライ兄のIS関連の事余り知らないな……

「あ、紅月先生来られたんですか」

「ええ、試合も終わったしね」

あ、一夏くんご苦労様惜しかったわね」

カレンさんがこっちに来て労ってくれた

ライ兄とカレンさんだけだよ…労ってくれるの

「ところで織斑先生、ライのISだけど……」

「ああ、私も気になっていてな…とりあえず皇が来ても、あ、帰ってきましたよ『」

千冬姉の言葉を遮って山田先生が指差した方には……

セシリアを背負っているライ兄がいた

ピキッ!!

……ヤバい、この周りの温度の下がり方は…

恐る恐る千冬姉達を見てみると…

額に青筋を立ててライ兄の方を見ていた

うん………かなり怖い

「えっと……ライ兄、一体どうしたの？」

この状況で訊いた俺は凄いいんじゃないかと自分で思う

「気絶したみたいでな、とりあえず保健室に連れてこようと思って」

「そ、そうなんだ……」

「ああ、にしてもさっきからこっちをジッと見てるが……どうしたんだ皆？」

『別に!!』

「……そ、そうか」

あの迫力は恐いの一言だろ

ライ兄も若干たじろいてるし

「じゃ、じゃあ、俺はオルコットを保健室に連れていくから」

そういうと、ライ兄は早足で保健室に向かって行った

（カレン視点）

代表決定戦の夜、私は千冬と一緒にある人物に電話をかけているのだが

「はいはい、皆のアイドルのたばこ『ブチッ』」

思わず切ってしまった

「カレン…どうした？」

「あ、ごめん

思わず切っちゃった」

再度掛け直すと

「酷いよ、こーちゃん!？」

自分から掛けてきて切るなんて!」

「ごめんね、束

余りにも非現実的な事を言うもんだから切っちゃった」

「謝った後で貶すのはどうかと思うよ、こーちゃん!？」

貶すも何も貴女がアイドルなんて……………ないわね

「そんなことは置いといて
訊きたいことがあるんだけど？」

「ほ、本当に酷いよこーちゃん
それで、訊きたいことって何？」

「今日、ライのIS見たんだけど…あれは何？」

「あ、らっくんのIS見たんだ
あれはね、らっくんのISが治るまでの代用機だよ」

「そんな事を訊いてるんじゃないわ!
あのISに使っている技術の事をいつてるのよ!」

「あ、あれはね、束さんが開発した新しいエネルギーなんだよ」

「じゃあ、それを詳しく教えなさい!」

「それは…………いくらこーちゃんでも教えられないよ
勿論ちーちゃんにも」

こ、このうさぎは…………

「カレン、私に替われ」

「……………はい」

私は千冬に電話を渡した

「束、私だ」

「ちーちゃん……」

こーちゃんにも言ったけどたとえちーちゃんでも言つつもりはないよ」

「聞こえていたからわかつている

これ以上は訊かん」

……………だと、思ったわ

これだけ訊いて答ええないんじゃないか仕方ないか…

「じゃあ、何を訊きたいのかな」

「ライさんと旅をしていたことだ」

そうね、それは私も訊きたかったわものすごくね！

「えっ、な、何のことかなちーちゃん？」

「ほう……知らぬ存ぜぬを貫くか…
だがな束、正直に答えないと…」

「こ、答えないと…?」

「斬るぞ」

「弾けるわよ」

自分でも驚くくらいドスの効いた声で言う私と千冬

「しよ、正直に話します!」

『じゃあ、きりきり話して貰おうか（貰いましょうか）!』

日本から遠く離れた場所で女性の悲鳴が聞こえたとか聞こえなかったとか

5 話（後書き）

えゝ無理矢理纏めて見ました
本当に書くのは大変ですね

さて、主人公の一人称の件ですが
えゝまず転生と言うことで子供の頃からやり直したと言うことは、
成長の過程で一人称も変わるのでは、と思った事から「俺」となり
ました。
ロスカラをやっている人、そうでない人も、ライは「僕」だと思
うでしょうが、どうか広いお心を持って納得していただけると幸い
です。

まだまだ、未熟な私ですがこれからもこの小説共々よろしく願
います。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9010v/>

IS 転生者は二度目の学園生活を送る

2011年9月3日02時08分発行